

強い雨風に警戒しましょう

日本では毎年のように台風や集中豪雨による被害が発生しています。しかし、地震と違い、台風や風水害はある程度発生を予測することができます。防災気象情報に注意して、危険が迫る前に早めに避難しましょう。

台風の強さの階級分け	階級	最大風速(m/秒)
	強い	33以上~44未満
	非常に強い	44以上~54未満
	猛烈な	54以上

(気象庁による)

台風の大きさの階級分け	階級	風速15m/秒以上の半径
	大型(大きい)	500キロ以上~800キロ未満
	超大型(非常に大きい)	800キロ以上

(気象庁による)

風の強さと被害

平均風速(m/秒)	風の強さ(予報用語)	人への影響	屋外・樹木の様子	走行中の車	建造物	およその瞬間風速(m/秒)	
10以上~15未満	やや強い	風に向かって歩けにくくなる。傘がさせない。	樹木全体が揺れ始める。電線が揺れ始める。	道路の吹き流しの角度が水平になり、高速運転中では横風に流される感覚を受ける。	樋(とい)が揺れ始める。	20	
15以上~20未満	強い風	風に向かって歩けなくなり、転倒する人も出る。高所での作業はきわめて危険。	電線が鳴り始める。看板やトタン板が外れ始める。	高速運転中では、横風に流される感覚が大きくなる。	屋根瓦・屋根葺材がはがれるものがある。雨戸やシャッターが揺れる。	30	
20以上~25未満	非常に強い風	何かにつかまっていけないと立っていられない。飛来物によって負傷するおそれがある。	細い木の幹が折れたり、根の張っていない木が倒れ始める。看板が落下・飛散する。道路標識が傾く。	通常で運転するのが困難になる。	屋根瓦・屋根葺材が飛散するものがある。固定されていないプレハブ小屋が移動、転倒する。ビニールハウスのフィルムが広範囲に破れる。	40	
25以上~30未満						固定の不十分な金属屋根の葺材がめくれる。養生の不十分な仮設足場が崩落する。	50
30以上~35未満							外装材が広範囲にわたって飛散し、下地材が露出するものがある。
35以上~40未満	猛烈な風	屋外での行動はきわめて危険。	多くの樹木が倒れる。電柱や街灯で倒れるものがある。ブロック壁で倒壊するものがある。	走行中のトラックが横転する。	住家で倒壊するものがある。鉄骨構造物で変形するものがある。		
40以上							

※平均風速は10分間の平均、瞬間風速は3秒間の平均のこと。

(気象庁による)

※数十年に一度の強度の台風や同程度の温帯低気圧により、暴風が吹くと予想される場合に**特別警報**が発表されます。

雨の強さと被害

1時間雨量(ミリ)	予報用語	雨の降り方
10以上~20未満	やや強い雨	ザーザーと降る。家の中では雨の音で話し声がよく聞きとれない。
20以上~30未満	強い雨	どしゃ降り。小さな川や道路わきの溝から水があふれる。
30以上~50未満	激しい雨	バケツをひっくり返したように降る。道路が川のようになり、山崩れやがけ崩れが起きやすくなる。
50以上~80未満	非常に激しい雨	滝のように降る。マンホールから水がふき出す。
80以上	猛烈な雨	恐怖を感じる。雨による大きな災害が起きる危険があり、嚴重な警戒が必要。

(気象庁による)

防災チェックポイント

大雨による主な災害

【外水氾濫】

河川の流量が異常に増加することによって起こる。堤防の決壊や河川の水が氾濫する。

【内水氾濫】

河川の増水や高潮によって排水がはばまれたり、排水が追いつかず用水路や下水溝などがあふれる。

【土砂災害】

●山崩れ・がけ崩れ

山の斜面が急激に崩れ落ちる。瞬時に発生する。

●土石流

谷や斜面にたまった土砂や岩石が一気に押し流される。破壊力が大きい。

●地すべり

比較的ゆるやかな斜面の土壌が滑り落ちる。一度に広範囲で発生する。

風水害に備えましょう

家の内外の風水害対策

台風や大雨の到来は予測できるからと安易に考えてはいけません。台風や大雨は私たちに何度も大きな災害をもたらしています。油断せず、日ごろから十分な対策を立てておきましょう。

屋外

●雨どい

継ぎ目のはずれや塗装のはがれ、腐りがないか確認。落ち葉や土砂で詰まらせないように掃除しておく。

●屋根

瓦のひび、割れ、ずれ、はがれ、トタンのめくれ、はがれがないかを確認。

●外壁

モルタルの壁に亀裂はないか、板壁に腐りや浮きはないか、プロパンガスのボンベは固定されているか、などを確認。

●窓ガラス

ひび割れ、窓枠のがたつきはないか確認。また強風による飛来物などに備えて、外側から板でふさぐなどの処置を取る。

●ブロック塀

ひび割れや破損箇所は補強する。

●ベランダ

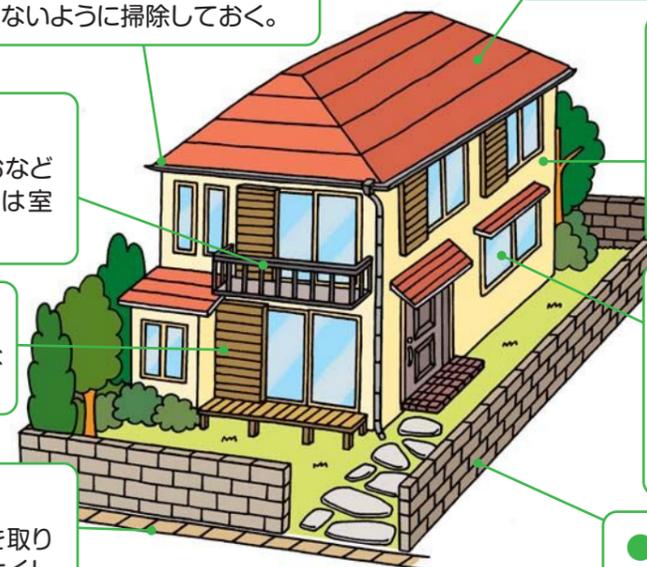
鉢植えや物干しざおなど飛散の危険が高い物は室内へ。

●雨戸

がたつきやゆるみなどがあれば補強する。

●側溝

側溝のゴミや土砂を取り除き、雨水の排水をよくしておく。



屋内

台風や大雨が近づいてきたら

- 停電に備えて懐中電灯や携帯ラジオを準備する。
- 避難に備えて貴重品などの非常持出品を準備する。
- 気象情報をテレビ・ラジオで注意深く聞く。
- 断水などに備えて、飲料水などを確保しておく。

- むやみに外出しない。
- 浸水などのおそれがあるところでは、家財道具や食料品、衣類、寝具などの生活用品を2階などの高い場所へ移動させる。
- 高齢者や乳幼児、病人などを安全な場所へ避難させる。



被災後の安全確認

防災チェックポイント

台風や豪雨が去った後は、危険が潜んでいることが多いので、地域ぐるみで協力し合いながら安全に復旧活動しましょう。

- 断線した電線が垂れていたら、木製の棒などで安全な場所へ移す。
- 落下や倒壊しそうな危険物があれば、直ちに補強や除去をする。
- 浸水の被害に遭ったら消毒を念入りにする。
- 水害を受けたら衛生面に注意する。水道水は煮沸し、手の消毒を忘れないなどの注意が必要。

- 活動時にはけがをしないように肌を露出しない服装にする。ヘルメットを着用して落下物に備える。
- 家の中は、風通しをよくして乾燥させる。



集中豪雨やゲリラ豪雨から身を守りましょう

集中豪雨は、短時間のうちに狭い地域に集中して降る豪雨のことで、梅雨の終わりごろによく起こります。狭い地域に限られ突発的に降るため、その予測は現状困難です。気象情報や起きている現象から危険レベルを判断し、行動することが重要になってきます。

集中豪雨の危険を知っておきましょう

■短時間で危険な水位

河川、溪流、下水管、用水路などは、激しい雨が降ることやまわりから雨が流れ込むことで、数分から数十分で危険な状態となります。



■注意報や警報が出ない雨でも災害が発生する

大雨や洪水の警報・注意報の発表基準に達していないわずかな雨でも、災害が発生するおそれがあります。



■下水の排水能力を超える大雨

下水道の雨水排水能力(1時間当たり50ミリ)を大きく超える時間雨量100ミリ以上の豪雨が頻発しています。



■離れた場所の雨でも影響する

自分のいる場所で強い雨が降ってなくても、上流で降った雨が流れてきて、危険な状態になる場合があります。



危険は急激に迫ってくる!

地下が危ない!

地下街や地下鉄、地下駐車場など、都会には多くの地下施設があります。これらの場所は出入り口が限定されていたり、地上で起こっている災害の発生に気づきにくいという危険性があります。いったん災害が発生すると、避難や救助などが困難になり被害が拡大します。

想定される危険

- 1 水が急激に地下に流れ込む**
大雨や洪水が起きた場合、地下空間に短時間で水が流れ込んでいきます。
- 2 水圧でドアが開かない**
浸水によってかかる水圧は想像以上に高く、ドアが簡単には開かなくなります。
- 3 ビル全体が停電に**
地下施設の浸水によっては、ビル全体が停電になり、外部と連絡が取れなくなります。

避難のポイント

ハザードマップで確認
ハザードマップなどを利用して、事前に大雨や洪水時の危険区域を知る。

天気予報を確認
日ごろから天気予報を確認し、大雨や洪水時の地下施設の利用を極力避ける。

乗り物が危ない!

大雨が降っているときには、路面冠水に遭遇する危険性があります。

想定される危険

- 1 激しい雨で前が見えなくなる**
大雨時は、どれだけ車のワイパーを動かしても、前が見えなくなってしまうことがあります。
- 2 路面冠水の危険**
路面冠水で車のエンジンが停止することがあります。空ぶかしをしてマフラーからの浸水を防ぎましょう。
- 3 車から出られなくなる**
浸水中の車は、水圧でドアが開かなくなります。また、60~70センチまで浸水すると車が浮き始めます。

避難のポイント

徐々に車のスピードを落とす
雨で視界が悪い場合、急停車せず、ゆっくりと減速する。

エンジンが止まってもあわてない
エンジン保護のため再始動せず、感電防止のため車のキーをオフにする。

ガラスを破って脱出する
万が一に備えて、特殊ハンマーを車内に常備することと、あわてずできるだけ早く窓を割って脱出する。

このような前兆を確認したら避難しましょう



- ! 川の近くでは、まわりの空が真っ黒になったらすぐに避難する
- ! 雷鳴や稲妻を確認したら建物内へ避難する
- ! 冷たい風が吹き出したら注意する
- ! 大粒の雨やひょうが降り出したら建物内へ避難する
- ! 雨の日に周囲より低い位置にいる場合は、高い場所へ移動する
- ! 川の近くでは警告のサイレン音がしたらすぐに避難する

浸水などから避難するときの注意点

ポイント1 動きやすく、安全な服装で

ヘルメットで頭を保護し、靴はひもで締められる運動靴にする。裸足・長靴は厳禁。



ポイント2 足元に注意

道路が冠水すると足元が見えにくくなり、側溝やマンホールに気づきにくくなる。長い棒などを杖代わりにして歩くと安全。



ポイント3 単独行動はしない

避難するときは2人以上です。流されないように、ロープで互いを結ぶ。



ポイント4 深さに注意

歩行可能な水深の目安は約50センチ。水の流れが速い場合は20センチ程度でも危険になる。危ないと判断した場合は、無理をせず、高所で助けを待つ。



ポイント5 要配慮者に配慮を

高齢者や傷病者は背負い、子どもには浮き輪などを着けて安全を確保する。



防災 チェックポイント

ゲリラ豪雨に注意しましょう!

近年、狭い範囲に短い時間で強い雨を降らせる「局地的大雨」や「集中豪雨」によって、人の命が奪われるケースが起きています。これらの雨は、発生の予測が難しいことから、通称「ゲリラ豪雨」と呼ばれています。

ゲリラ豪雨による水害の特徴としては、「河川の氾濫」「急な増水」「低い土地が水に浸かる」などがあります。

河川に遊びに行くときは、天気予報などで局地的な雨の心配がないか確かめるなど十分に注意しましょう。



防災 チェックポイント

使いこなそう気象庁のホームページ

気象庁のホームページでは、さまざまな気象予報が掲載されています。例えば、「ナウキャスト」は、降水の強さ、雷の激しさや可能性、竜巻などの激しい突風の発生しやすさについて、1時間先までの分布を予測しています。ホームページでは「雨雲の動き」で確認できます。そのほかの気象情報も活用しましょう。

「ナウキャスト(降水・雷・竜巻)」

気象庁 ナウキャスト 検索

風水害から命を守る！「危険判断能力」を高めましょう

風水害による被害を最小限に抑えるためには、まず風水害に対する正しい知識が必要です。あわせて住まいがある場所で水害や土砂災害などが発生したら、どのような状況になるのか把握しておかなければなりません。風水害に関しては、数多くの気象情報が発表されています。自治体ではそれらを参考にして高齢者等避難や避難指示など避難に関する情報を発令します。これらの情報をもつ意味なども理解しておき、いざというときに備えましょう。

自宅周辺の災害危険度を知っておきましょう

■ハザードマップを確認しましょう

ハザードマップとは、地域における災害の危険度を示した地図です。例えば、洪水ハザードマップは、予想される浸水深の程度に応じて危険度を色分けし、表示しています。ハザードマップを確認して、自宅付近がどの程度の危険度になっているのか知っておきましょう。

ただし、ハザードマップに掲載された情報は、「特定の想定」に基づく被害予測です。東日本大震災で明らかになったように、想定を上回る被害が出るおそれは十分にあります。ハザードマップを活用して防災意識を高めることは重要ですが、頼り切ってしまうのは危険です。いざというときに自ら危険を判断できる能力を養うことが本当の防災対策です。

●インターネットで調べる

ハザードマップは「印西市防災ポータルサイト」の中で公表されています。

▶「印西市防災ポータルサイト」(右図)



●自治体に問い合わせる

ハザードマップの有無や既存マップの更新予定などについては、直接自治体に問い合わせる。



「印西市防災ポータルサイト」

■過去の風水害履歴を調べましょう

過去に水田や湿地だった場所、河川の近く、低地などは浸水被害を受けやすいことは容易に想像できます。斜面の近くではかけ崩れなどのおそれもあるでしょう。こうした災害は繰り返し発生します。地域の歴史を図書館で調べるなどして確認してみましょう。地域によっては、風水害が多いことが地名に残っている場合もあります。



防災 チェックポイント

こんな土地はこんな災害に注意を！

- 浸水…………… 沖積地、河川敷
- 土砂災害……… 造成地、崖線（河岸段丘）、扇状地、山地

防災気象情報に敏感になりましょう

■多くの防災気象情報がある

大雨や台風の時、気象庁はさまざまな気象情報を発表します。気象情報の種類とそれらの情報がどのような状態を意味しているのか、どのように私たち住民に届けられるのかを知っておくことは大変重要です。

■主な防災気象情報

- 注意報** …………… 災害のおそれがあるときに発表される
- 警報** …………… 重大な災害のおそれがあるときに発表される
- 特別警報** …………… 数十年に一度の大災害が起きると予想される場合に発表される
- 顕著な大雨に関する情報** …… 大雨による災害発生の危険度が急激に高まっている中で、線状の降水帯により非常に激しい雨が同じ場所で降り続けている状況のときに発表される
- 土砂災害警戒情報** …………… 土砂災害のおそれがあるときに発表される
- 台風情報** …………… 台風が発生したときに発表される
- 竜巻注意情報** …………… 竜巻・ダウンバースト(下降噴流)などによる激しい突風が発生しやすいときに発表される



■危険が迫る前に、早めの避難

自治体では気象庁が発令する気象情報や消防団の監視などを参考に避難に関する情報を発令します。しかし、高齢者等避難や避難指示などの情報は各世帯の家族構成や土地の地形、降雨状況によって、すべての世帯に最適なタイミングで発令することができません。

場合によっては、避難に関する情報が出されるよりも前に自主的に避難することも必要になります。「危険を察知して自分の命を守る」という危険を判断する能力を身につけることが求められます。

■適切な避難の判断を！

- 1 局地的大雨などは、気象庁の観測網でとらえられない場合があり、自治体の高齢者等避難や避難指示が間に合わないおそれがあります。
- 2 危機が迫っているにもかかわらず、まわりが避難していないので大丈夫と思ってしまうのは間違いです。率先して避難しましょう。
- 3 高齢者等避難や避難指示が出されたら「まだ大丈夫」と判断せずすぐ避難しましょう。



防災 チェックポイント

被害が心配される時には

- 気象情報に注意する
テレビやラジオ、インターネットで発表される気象庁からの特別警報・警報・注意報や、気象情報に注意する。



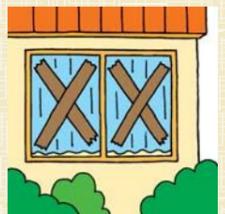
●むやみに外出しない

台風が接近しているときや、豪雨の危険性があるときは、外出を控える。外出する際も警報や注意報に注意し、危険な場所には近づかない。



●窓ガラスを補強する

外から板でふさいだり、×印にガムテープをはるなどして補強する。ガラスが割れたときに破片が飛び散らないよう、内側はカーテンをひく。



土砂災害から身を守りましょう

土砂災害の被害を軽減するためには、普段から土砂災害に対する備えが必要です。家族で家のまわりの危険箇所を確認し、災害に備えて避難経路や避難場所について話し合っておきましょう。

土砂災害の種類と前兆現象

<p>がけ崩れ・山崩れ</p> 	<p>雨水がしみ込んで、やわらかくなった斜面が急に崩れ落ちます。日本で最も多い土砂災害で、人の住む家の近くでも突然起きるため、逃げ遅れて犠牲となる人も多い災害です。</p>	<p>こんな前兆現象に注意!</p> <ul style="list-style-type: none"> ●がけからの水がにごる。 ●地下水やわき水が止まる。 ●斜面のひび割れ、変形がある。 ●小石が落ちてくる。 ●がけから音がする。 ●異様なにおいがする。
<p>地すべり</p> 	<p>地盤が弱い土地に豪雨が降り、ゆるくなった斜面の一部が、地下水の影響と重力でゆっくり下へ移動する現象です。ひとたび発生すると、家や道路、鉄道など広い範囲に被害を与えます。</p>	<p>こんな前兆現象に注意!</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地面にひび割れができる。 ●井戸や沢の水がにごる。 ●がけや斜面から水がふき出す。 ●家やよう壁に亀裂が入る。 ●家やよう壁、樹木、電柱が傾く。
<p>土石流</p> 	<p>長雨や集中豪雨などで、山腹や谷川の石や土砂がいきなり下流へ押し流されます。いきおいが強く、圧倒的なスピードで、進行方向にあるものを次々とのみ込み、壊していきます。</p>	<p>こんな前兆現象に注意!</p> <ul style="list-style-type: none"> ●山鳴りがする。 ●雨が降り続けているのに、川の水位が下がる。 ●川の水がにごったり、流木がまざったりする。 ●腐った土のおいがする。

2つの警戒区域を知っておきましょう

「土砂災害警戒区域」「土砂災害特別警戒区域」とは、「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」に基づいて都道府県によって指定・告示された区域のことです。ハザードマップなどで土砂災害のおそれのある地域をご確認ください。家が該当区域にある場合は特に早めに避難するようにしてください。

土砂災害警戒区域（通称：イエローゾーン）

土砂災害のおそれがある区域のこと。

指定区域にお住まいの場合

- 危険な場所を点検し、防災情報を収集する。
- 避難訓練に参加する。
- ハザードマップで避難所を確認しておく。
- 土砂災害警戒情報や雨量の情報を注意する。
- 土砂災害警戒情報などが発表された際には早めに避難する。

土砂災害特別警戒区域（通称：レッドゾーン）

土砂災害警戒区域のうち、建築物に損壊が生じ、住民に著しい危害が生じるおそれがある区域のこと。

指定区域にお住まいの場合

- 著しい損壊が生じるおそれがある建築物に対し、移転などが勧告される可能性がある。
- 危険な場所を点検し、防災情報を収集する。
- 避難訓練に参加する。
- ハザードマップで避難所を確認しておく。
- 土砂災害警戒情報や雨量の情報を注意する。
- 土砂災害警戒情報などが発表された際には早めに避難する。

避難のタイミング

土砂災害は、突発的に発生し、すさまじい破壊力で一瞬にして生命や財産を奪ってしまいます。土砂災害の発生を予測するのは難しいものですが、前兆現象が見られる場合があります。身近に土砂災害の危険箇所があり、前兆現象（20ページ参照）を確認した場合は、早めに避難しましょう。



こんな場所では
早めの避難を
土砂災害に注意

■造成地
丘陵を切り崩してつくられた造成地は、豪雨で地盤がゆるむと崩れる危険性がある。



■傾斜地
傾斜30度以上、高さ5メートル以上の急傾斜地は、がけ崩れの危険がある。樹木の少ない山間部の渓流は土石流の危険もある。



土砂災害からの避難のポイント

土石流、がけ崩れ、地すべりに大別される土砂災害は、被災すると生命の危険が大変高いため、災害発生前に避難を終えなければなりません。

■ほかの土砂災害危険区域は通らない



避難する際は、ほかの土砂災害危険区域（危険箇所・警戒区域など）は通らないようにしましょう。

■長雨や豪雨に注意

1時間に50～80ミリ以上、または降り始めからの降雨量が200～300ミリ以上になったときには、土砂災害が発生するおそれがあるので警戒しましょう。

■前兆現象を知り早めに避難

土砂災害の発生前には、前兆現象がみられることがあります。前兆現象を知ったときは、すみやかに避難しましょう。

■土石流に直面したときの逃げ方

土石流のスピードは、時速20～40キロととても速く、流れに背を向けて逃げても、追いつかれてしまいます。土砂の流れる方向に対して直角に走って逃げましょう。

■避難が困難なときは2階以上の、斜面から離れた部屋などに緊急避難

比較的高い鉄筋コンクリート造などの堅固な建物の2階以上の、斜面から離れたところに位置する部屋などに避難しましょう。



防災
チェックポイント

土砂災害警戒情報
大雨などにより土砂災害発生の危険が高まったとき、都道府県と気象庁が共同で「土砂災害警戒情報」を発表します。情報が出たら特に注意が必要です。

竜巻から身を守りましょう

竜巻は、発達した積乱雲の強い上昇気流によって発生する激しい空気のうず巻きです。うずの直径は数十～数百メートルに及び、しばしば漏斗状または柱状の雲を伴います。風速が毎秒70メートルを超えるような猛烈な風が吹くことがあり、短時間で狭い範囲に集中的に被害をもたらします。

竜巻に関する気象情報を入手しましょう

竜巻が発生しやすい気象状態が予想される場合の気象情報は段階的に発表されます。こうした気象情報と、常時提供される「竜巻発生確度ナウキャスト」（17ページ参照）を組み合わせて、身近な場所での竜巻の発生に備えましょう。

	気象情報	常時(10分ごと)発表される情報	利用者の対応
半日～1日前	気象情報 「竜巻など激しい突風のおそれ」と明記します	竜巻発生確度ナウキャスト ● 竜巻など激しい突風が発生する可能性が高い領域を2段階の発生確度で示します ● 発生確度2となった地域には竜巻注意情報が発表されます 発生確度1 1～7%程度の確率で発生 発生確度2 7～14%程度の確率で発生	● 事前に竜巻が発生しやすい状況かどうかを確認する ● 今後の気象情報（雷注意報など）に注意する ● 外出前に最新の気象情報を確認する ● 周辺の気象状況の変化や今後の気象情報（竜巻注意情報、竜巻発生確度ナウキャストなど）に注意する ● 空の様子に注意し、空が暗くなるなど積乱雲が接近する兆しを感じたらすぐに身の安全を確保する ● 竜巻発生確度ナウキャストで竜巻が発生するおそれがある地域を確認し、自分がいる場所がどの程度危ないかを把握する
数時間前	雷注意報 「雷、ひょうなどとともに「竜巻」も明記します		
0～1時間前	竜巻注意情報 「今、まさに竜巻が発生しやすい気象状況になっている」ことを知らせます		

※現在の技術では、竜巻などの発生を事前に予測できない場合があります。また、竜巻注意情報が発表されたからといって、必ず竜巻が発生するわけでもありません。同情報を入手したときは、まずは空の状況を確認し、周辺に危険が迫っているのかどうかを各人が判断することが重要です。

竜巻が迫ってきたら

■住宅内では

- 窓は閉め、カーテンも閉める。
- 雨戸やシャッターを閉める。
- 家の中心部に近い、窓のない部屋に移動する。
- 地下室や建物の最下階に移動する。
- 低い姿勢を取り、両腕で頭と首を守る。



■屋外では

- 近くの頑丈な建物内に避難する。
- 車の中、物置や車庫・プレハブの建物などには逃げない。
- 近くに頑丈な建物がない場合は、水路や溝などくぼんだ場所（急な豪雨に注意）や物陰に身を伏せ、両腕で頭と首を守る。



■オフィスビルなどでは

- 窓のない部屋や廊下へ移動する。
- ガラスのある場所から離れる。
- エレベーターは停止するおそれがあるので乗らない。
- 低い姿勢を取り、両腕で頭と首を守る。



実際に竜巻が接近してきたときの周囲の変化

- 1 空が急に暗くなる
- 2 大粒の雨や「ひょう」が降る
- 3 漏斗状の雲が目撃される
- 4 「ゴー」というジェット機のような音が聞こえる
- 5 飛散物が筒状に舞い上がる
- 6 気圧の変化で耳に異常を感じる

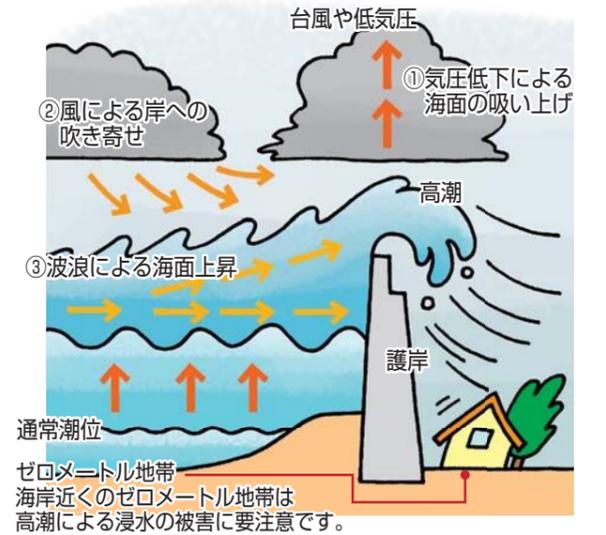
高潮から身を守りましょう

高潮は、台風や猛烈に発達した低気圧が原因で発生し、気圧の低下による吸い上げ効果や同じ風向きで強風が吹き続けることによる吹き寄せ効果により、海面が上昇する現象です。場合によっては1～2日にわたって海面の高い状態が続きます。警報などが出たら、すぐに避難しましょう。

高潮発生の仕組みと危険な場所

■高潮発生の3つの要因

- 1 **気圧低下による海面の吸い上げ**
台風や低気圧の中心気圧は周辺より低いため、中心付近の空気が海面を吸い上げる結果、海面が上昇します。
- 2 **風による岸への吹き寄せ**
台風による強い風が海岸に向かって吹くと、海水は海岸に吹き寄せられて、海岸付近の海面が異常に上昇します。
- 3 **波浪による海面上昇**
大きな波が海岸に向かって絶え間なく押し寄せると、沖に急速に戻ることができず、岸に近い場所に多量の海水がたまるようになり、海面が上昇します。波が大きいほど、海面の上昇も大きくなります。



■高波が発生しやすいところ

- 1 **南向きの海（太平洋沿岸）**
台風が南側に開いた湾の西側を通過するときは、台風中心の低気圧で海面が持ち上げられた状態になります。
- 2 **湾の奥まったところ**
海岸線が、V字型に奥に行くほど狭くなっているところは、持ち上がった海面の逃げ場がなくなり一層持ち上がります。
- 3 **台風の東側**
台風が通過するとき、その東側には南風の暴風により海水が吹き寄せられます。



高潮災害における避難情報発令基準

災害が発生、または発生するおそれがある場合は、住民に対して避難指示などを発令します。また、数十年に一度の高潮になると予想される場合に特別警報を発表します。各避難情報に応じた避難行動を取るようしましょう。

区分	発令基準（次のいずれかに該当した場合に発令する）
【警戒レベル5】 緊急安全確保	【災害が切迫】 ● 水門、陸閘等の異常が確認された場合 ● 潮位が「危険潮位」を超え、浸水が発生したと推測される場合 ● 水位周知海岸において、高潮氾濫発生情報が発表された場合 【災害発生を確認】 ● 海岸堤防等が倒壊した場合 ● 異常な越波・越流が発生した場合 ● 水位周知海岸において、高潮氾濫が発生した場合
【警戒レベル4】 避難指示	● 高潮警報あるいは高潮特別警報が発表された場合 ● 警戒レベル4避難指示の発令が必要となるような強い降雨を伴う台風等が、夜間から明け方に接近・通過することが予想される場合
【警戒レベル3】 高齢者等避難	● 高潮注意報の発表において警報に切り替える可能性が高い場合 ● 高潮注意報が発表されている状況において、台風情報で、台風の暴風域が市区町村にかかると予想されている、または台風が市区町村に接近することが見込まれる場合 ● 警戒レベル3高齢者等避難の発令が必要となるような強い降雨を伴う台風等が、夜間から明け方に接近・通過することが予想される場合 ● 「伊勢湾台風」級の台風が接近し、上陸24時間前に、特別警報発表の可能性があり、気象情報や気象庁の記者会見等により周知された場合

※特別警報が発表されていなくても早め早めの行動をとりましょう。